い。伊勢神宮に参拝したからと言って拝観出来る品では
ない。かりに拝観出来るとしても内宮、外宮及びそれぞ
れの別宮に、その由来にしたがって厳深く秘蔵されてい
るものであって、あれだけのものを拝観するには多大の
時日を要するわけである。それが至近の大分市に一堂に
集められ、手際よく陳列されて思うままに観覧出来たこ
とは有難いことであった。

第二に伊勢神宮は、何事のおはしますかは知らねども、
かたじけなさに涙こぼるる、日本民俗の心の古里である
が、その神宮にそれぞれの由来にしたがい、長い歴史を
背景としてあれだけのものが伝えられていることである。
史的価値は年経るままに益々増大するであろう。神宮の
宝物として、又日本民族の宝として幾久しく保存し、万
世に亘って伝えねばならないものである。

第三にその文化財としての文化的価値である。之は大
分合同紙上に度々論ぜられていたが、豪華な数振りかの
太刀や優美な数々の織物、其他工芸美術の粋を集めた数
多の器物等々、唯眼を見張って感嘆を久しくするのみで
あった。

かくて神韻漂う世界に浄化止揚された幾時間かを過し
たことは、意義深いことであった。

（おわり）

踏査記

直川の村里、横川赤水をめぐる

文　羽柴弘
俳句　吉田雅雄

これは予定していなかった臨時の現地研修、かねて宿題にしていた直川村の横川に出かけることにした。四月の終りから五月の初めにかけてが、いわゆるゴールデンウイークの連休の一日、天気よよし、

じっとしておれるか とばかり、いつも出かける連中に はがきを差立てるという急な企画、直川の郷土研究会と合体ということで、休石会員の奔走により マイクロバスを使用ということで、午前中横川、午後は赤水ということになった次第。

五月五日　子供の日。幸い絶好の五月晴。午前七時半直川村久留須に落合った数方の顔ぶれは、

平田、高世西顧問、高木会長、阿野、吉田、平川、五十川伊、加藤、羽柴の定連さん、珍らしくも五十川義、山本個、西校長さんに、中島、阿加賀川酒店、阿野松男氏の十二名に、地元からは山下、柳井、西氏に休石会員の十五名。又益田顧問は宮服定光氏を入せて事で参加。

と、ちょうど程よい人数とはなった。幸い直川林業の氏がマイクロバスを御提供、終日みずから運転奉仕して下さるという、まことに恵まれたことである。

早速みんなバスに乗りこみ横川へと向こう。早速山下氏は柳井氏の書かれた横川地区の案内地図資料を印刷したものを配って下さる。この御配意ハ嬉しかった。午前中行く先々でこの資料は大変役立った。

月形をすぎての車中、柳井氏は車窓から左手の山を指さして、文化九年の百姓一揆の際、因尾、仁田原、赤水などの百姓達が集って鉦太鼓を打ち鳴らし、騒動の発端をなした於流坂（おりうざか）がおそこであると教えて下さる。一行はがぜん蒲政のころの歴史の中に没入する。

躑躅（つつじ）燃ゆる 尾根が一揆の集結地

車はまっ直に横川の谷をのぼり、庵の木で秋元潔氏が案内役に加わって下さる。川向うには二軒の農家が全く同じように主家、納屋、倉きれいにまっ白く漆喰を施して並んでいる。平田顧問が目さとくそれを見つけて、典型的な日本農家であると言われる。なるほどと思った。急いで車から降りてカメラに納める。

井取部落にはいる。まるで城のような家並が一かたまりになって豊かさを示している。村の中程の庵に上る。無住の由であるが、きれいなまかである。庭先に古塔が並んでいる

芍薬の蕾ふくめる無住庵

春山義夫氏が来て下さり、女々井取の伝説など承る。歩いて村の入口、川向うの天満社にもうで、旧道の庚申塚などを見る。ここで山を越して仁田原から桜井幸氏が来られ、紫内役の人が更に一人ふえる。

落人の裔も井取の苗代ふみ

井取を後にした一行は、一応又江まで後戻り、横手部落の一番奥竹の脇の熊野神社にまいり、それから寺の妻（小部落名）の向うの山麓の五輪塔群を調べる。部落の長老酒井興市氏がやって来られたので、この塔群についての古い事がらや、昔からの伝承など承る。益田顧問は丹念にしらべをつづけられる。

もう十時をすぎていた。招ぜられるままに酒井家に立ち寄り、茶菓のおもてなしにあずかる。お茶は八十八夜の新茶であったのがうれしく、みんな元気づく。

橋杭につなぎ沈めし　種俵

それから善正寺による。慶長年間の創建になる古い真宗の寺である。生憎く今日は事情あって住職御一家はお留守であった。

月形氏の車でさかり、まず佐伯惟治を祀る鵜尾神社に参拝する。今は既に故人だが神職小野登代芳老人の謹厳であったお姿を思いうかべる。社殿かく境内の隅々にまで先神職永年の御経営奉仕の跡がうかがえる。

下ってすぐ参道脇の、横川大庄屋の屋敷にあがる。さすがに広い構えである。今日持主がかわり野々下悟氏のうちであるが大庄屋は武田姓であって、全横川を支配していた。その故にここに佐伯史談第四十九号に発表の「従是東佐伯領」の石の標柱のあるところ。野々下氏は所用あって御不在ながら、羽柴宛のていねいな置手紙と共に、その重たい石の標柱を床下から引っ張り出すようコロを下にかませ、綱まで用意して下さってある。長さ二・一五米（内基礎部分五〇糎）、巾二・三糎の真四角な砂岩系の真石である。従是東佐伯領の六文字が一面だけに堂堂たる書体で深くほられてあり、全体として一か所も欠損がなく、大変重たく、何人かでコロを使い綱を使ってやっと引っ張り出した次第である。休石会員の言われる如く、建てる現地にはついに運ばれることなく明治以来百年余を、この床下で空しく過したことになる。

新緑や是より東佐伯領

それから一回は柳井家の上の旧庚跡の小さなお堂に、石巻婆を見る。熱心な休石会員が入口の土台にしてあった人を見つけ出し、村の人達にすゝめて抜かしたものでお堂の中の隅に立てかけてあった。次のような文字が読みとられて、建立の趣旨が明瞭である。

預修　造立石塔婆

機先信士　為現當二世悉地圓満也

長禄第二春二月吉日

長禄は室町時代、今から約五百年の昔で、この石塔婆のような例はこの地方にはあまりない。貴重なものである。お堂の前には数基の供養塔や五輪塔が並んでいたが、定がついて見ると「日まわり」らしい花の苗があちこち

に植えられている。月形の村の人達はやはりここを信仰崇敬の地として、古塔の類を大事に守ってくれている。

時刻は正午に近い。一同は車で久留須に出、柳井氏の御子息経営のドライブ・インに立ち寄り、お茶をいただいて昼食をとる。それはまことに和やかな情景であった。

午後は赤木谷である。この赤木谷は佐伯史談会として昨年まで三度ばかり踏査し、その都度かなりくわしい資料を記録しているので、今回は見落のコースと要点だけ記すこととしよう。

車はまっすぐに吹原までのぼる。例の道端の大きな笠をかぶった六地蔵塔と墨書の銘文のある五輪塔をまず見て富尾神社に詣でる。社殿を改築しセメント瓦葺とかわり、瓦で祭神を偲ぶイメージはぶちこわしである。まことに味気ない思いであった。それから歩いて村の中腹どにある寺屋敷跡をたずねる。ここも無残、由緒ありげな数基の宝筐印塔は、苔むして倒れたまま、半ばは草におおわれてその数すら正確につかみ難い。何とかならないものか、これは吹原の古い歴史を物語る貴重な資料である。忘れているのを掘り起して整えたら、すばらしい宝筐印塔がいくつか並ぶはずである。

下って千人原の供養塔や庚申塔をしらべて、中津留の観音庵に向かう。道ばたの畑では女子中学生らしきが二三人、連休最後の日の茶摘をしている。

無住となっている庵は到るところ草や茨である。建物もかたむいてもう人は住めそうもない。然し二十数基の多種多様な石塔は健在である。宝塔あり、印塔あり、五輪塔あり、層塔あり。それらがまことにちぐはぐにでたらめに積み重ねられてあるが、感心に倒れたり草に埋ったままというのはない。粗めてきちんと整然と立ちならんでいる。何と言うても数が多い。赤木谷でも第一等と言えよう。まさに石造文化財の宝庫である。

一同は田圃で働いていた広瀬高徳氏に案内されて、川べりに湧く鉱泉の井戸を見学、又広瀬繁光氏方に立ちより、椽先で同氏所蔵の古銭の壺を見せていただく。数種類凡そ二百枚以上もあろうかと思われる宋銭や、私鋳の銭（びたせん）が、紐に通して輪にしてあった。

げんけ田に湧く鉱泉の四角井戸
ゆく春や二つの壺に渡来銭

このように次々に下車して歩いては見学するのを、泥谷氏は次々と車をまわし待っていて下さる。今度は更に下って野々内部落に入り、知江（しるき）の古塔をしらべ、心光庵を訪う。ここも無住である。良先の塔や背戸の大杉に、この部落の古さを偲ぶ。

花苔を指に擦り読む塔の文字

時計を見ると三時はとっくに下まわっている。堂師（どうじ）で今日終日御案内役を買って下さった柳井氏とお別れし、庵跡の古塔のこともあったが後日にのこし栗林に寄る。正明寺址と伝えられる寺屋敷跡に応永十八年の銘のある塔を見るためである。日名子太郎の「大分県金石年表」（昭和十年二月）にはきれいに三重の層塔で写真が載っているのに、基壇は掘りかえされ塔身は半ば土に埋まり、破損した笠も三個しか見当らぬ。秀麗な五重の層塔は見るかげもない。（日名子氏は「五重塔 初、三重古失」としている）

塔の世の遠きを偲ぶ著莪（やが）の花
寺屋敷跡とやあわれ著莪の花

既に四時に近い。一行は急いで車にのり、久留須に出て、今日一日御協力頂いた泥谷氏に一同心からお礼を申しあげ、地元の方々と別れてバスに乗って帰った。

（付記）若干予想していた通り横川に氏見るべきものは多くなかった。それを補って余りあるものは手後の赤穂の見学であった。これはマイクロバスあったればこそで、浪谷氏の御援助なくしては全く叶わなかったところであった。

赤穂谷の見学がはじめてであった会員の方々はいかに感じられたことか。

長田会長は近親に御不幸あり出発を加がなかったが、何かと御配慮を煩いた。又市柴氏役で御教示を頂いた山下、柳井、秋元様中の諸氏外地元数人の方々の御親切に感謝申上げる次第である。

尚三日目と経った後山下氏から「横川八景」のプリントが送って来たので次に掲げる。

資料

横川八景

撰作　山下貞男

過日は御足労様でした。出席者各位におついでの時に市報付下さい。少しオーバーですが、スケールの小さいなりに横川の印象を表現していると思います。

横川八景　詠人不知

月形の秋月
　旅人の杖やとゞめん月形の
　橋のなごさの秋の夜の月

大津留の落雁
　大づるの田毎に落つるかりがねは
　ゆたけき御世を饗ふなるらん

東の晩鐘
　たそがれを告ぐる東こ鐘の音に
　家居をさして帰る私人

後持岡の夕照り
　茄穂干すごもちの岡の夕日照り
　いずこも同じ秋は来にけり

尾上沖の夜雨
　妻恋うる尾の上の鹿を聞く時は
　沖の白さめを破る村雨

大石の晴嵐
　大石の砕くる音の山嵐
　梢のもみじ早やちりにけり

井取の暮雪
　引とりにあるで井取の山道を
　踏みなやみたる夕暮のゆき

羽木の帰帆
　真帆かけし小川のおとに船越の
　波寄の陸にかえる稲舟

研修記

養賢寺の墓地について

六月十日（土曜）午後二時―四時　書館で、

これは墓地を歩くはずであったが、書館前から雨になった。小降りの時もあったが、歩けば草がぬれているので下半身はすぶぬれになるので、室内研修に切りかえる。集ったものは高齢、高野、浦矢、佐賀、河野、徐石、羽柴、の七人、それに上湖の山本氏をはじめに顔をお見せになる。

まず机上で養賢寺墓地について。幸い現地にくわしい佐賀会員がおり、河野、羽柴も何度か足を運んでいるので、毛利家の墓所の周辺から順次高いところまでに亘り、戸倉西名、国矢、黄川山の名と家中の名家、松下、明石、秋月、高巻といった墓者、さては祇園町内に今も残る町家の墓所を次々と話し出す。思しやはり足で現地を歩き、五輪墓を見ることには、どうもピンと来ない。天気のよい日に又持ちなおすことにした。

話題はつい数日前の直川行きのことに及び、月形の藩領標柱のこと、上場の横川八景のこと、村切神社のことから天神社、怨霊神と話題展開する。

人数が七人でこじんまりした会合、これ幸いと藩政時代の庶民史料、古文書数通を羽柴は机上に出して、みんなの検討に供される。死んだ青木会員遺作の「船受手形」芦屋市の麻生会員がくれた「泥谷村の炭出文書」野津市の安藤一馬氏より頂いた「津久見村人別受手形」数通、そして宗郷日向市の狩生秋仙氏より頂いた「手馬取扱の掟書」と、どれも昔の人達の生活を律するものであるとそれはいくつかの挿話を引き出して賑やかな研究会となる。

この種の室内史談会は、場所とひまさえあれば度々催したいもの、人数は少なくてもよい、談話資料を持ちよりで、定例的にやりたいものであると感じた。我々は個人としての研究を怠ってはならないが、二三人でもよい、一しょに歩く、集って話し合う、そして会の力で、何かを社会への奉仕活動をする。そんな風にありたいと思った。

雨は更にはげしくなる。午後四時半散会。

（おわり）